

論文: Emerson and His Ideas of Social Reform: Evolution, Race, and Gender

(エマソンと社会改革思想—進化、人種、ジェンダーからの考察)

I. 論文の要旨

本論文は、19 世紀アメリカのルネッサンス期を代表する作家、思想家、詩人であるラルフ・ウォルドー・エマソンと当時の社会改革運動との関わりを検証し、その変遷を辿ること、エマソンの社会改革家としての側面を再評価しようとしたものである。

本論文の特徴として、次の四点があげられる。第一に、社会改革家として再評価するにあたり、これまでの先行研究を踏まえつつ、それをさらに発展的かつ包括的に論じている点である。19 世紀中葉のアメリカの文化的思潮を主導したエマソンが、当時活発に展開された奴隷制廃止運動や女性の権利運動などの社会改革運動には消極的であったとみなす従来の研究に対し、1990 年代より活発な見直しが行われるようになったが、本論はこの再評価の流れをくみつつ、これをさらに発展させる形で跡づけしようとしたものである。

第二に、社会改革家としてのエマソンを、ただ単に関連する演説や著作ないし改革運動との関わりからみるのではなく、彼の哲学的思考の中心を占める個人主義や自己信頼の根幹に進化論を見据え、この進化論と社会改革との関連性を明らかにしようとしている点である。本論は、エマソンの進化論が、人類や社会の永続的進歩という楽観主義と結びついていたばかりでなく、黒人（アフリカ系アメリカ人）や女性を進化の発展途上にあるとみなす否定的な方向に作用した可能性を指摘し、エマソンの人種・ジェンダー観における限界を明らかにした。その上で、そのような消極的な考えが社会改革運動との関わりを通してどのように変化したのか、その変遷を詳細に分析している。

第三に、これまでほとんど十分な研究がなされてこなかったエマソンの女性運動との関わりやジェンダー観に、大きく踏み込んだ考察を行っている点である。エマソンと奴隷制反対運動との関わりについては、ある程度の研究が蓄積されつつあるが、それと平行するように展開した女性運動との関わりについては、極端な資料の乏しさもあり、まとまった研究がほとんどなされていないのが実情である。本論はこの分野にも光をあて、社会改革家としてのエマソンをより包括的に捉えようとした。

第四に、上記三点を検証するにあたり、膨大な量のエマソンの日記や書簡といった一次資料、かつ彼に影響を及ぼした周囲の人々、とりわけエマソンに大きな感化力を有した女

性たちの書簡や自伝、伝記など広範囲に及ぶ資料を渉猟し、関連資料の欠乏という問題を超克しようとした点である。これにより、「コンコードの哲人」と称されたエマソンの家庭という私的領域に光があてられ、ジェンダーという視座から彼の新たな局面が提示された。

本論文は全体で6章の構成となっており、始まりの1章は序論として、最後の1章は結論として位置づけられている。また主たる論証がなされる2章から5章の各章はそれぞれ3節に分かれ、発展的かつ詳細な議論が展開される。

## 第1章 Introduction

第1章の序章では、本論文のテーマに関わる先行研究を辿りつつ、本論文をこの文脈に位置づけると同時にその独自性と意義を明確にする。まず、1990年代以降、エマソンの奴隷制廃止運動との関わりが検証され、これまで社会問題とは無縁の孤高の思想家と捉えられてきたエマソン像の見直しが行われた結果、彼の政治的活動家としての側面が再評価されていることを説明する。この点が20世紀末まで見過ごされてきた要因として、次の2点をあげている。第一にエマソンの奴隷制反対に関する講演や資料が少ないこと、第二に Oliver Wendell Holmes などの著名な伝記作家が社会改革者としてのエマソンの側面を取り上げなかったことが後世に影響を与えたことである。

次に、エマソンと女性運動の関わりについては、若干の掘り起こしがあるものの、奴隷制問題に比してさらに資料が乏しく、全体像の把握はほとんどなされていない状態であることを指摘したうえで、この点については、限られた一次資料ばかりでなく、エマソンに影響を与えた女性たちの記録も丁寧に辿ることで検証するという、本論の手法が説明される。これらの女性たちの影響力については、奴隷制廃止運動に深く関わり、その過程で女性の置かれた状況に当時の奴隷たちと通底する問題が認識されたことを指摘し、本論における反奴隷制運動と女性運動という二つの大きなテーマのつながりを予示する。

## 第2章 Emerson as a Self-Reliant Reformer

第2章では、エマソンの社会改革の捉え方と科学的思考との関わりを考察し、最終的にたどりついた進化論的世界観と彼の神学の神髄である「大霊」(Over-soul) との影響関係を論じる。

### A. Ideological Commitment to Reform Movements

エマソンの哲学的思想の中心を占める自己信頼が、社会全体の向上よりも個人の精神的

改革を求めるものであったため、彼の社会に対する取組みが歴史家たちに疑問視されてきたが、本論は、当時のアメリカ社会における改革そのものが、今日的視点からみると、政治的というよりも精神的な活動であったこと、それゆえ、個人の改革が社会全体の改革へつながるとするエマソンの超絶的な姿勢は、決して社会から隔絶したものではなかった点をまず指摘する。個人の進歩が社会的影響力をもたらすと信じたことは、逆に言うと、社会問題は個人の道徳力の欠如を意味した。従って、社会改革は個人の努力によって可能であると考えた点で、エマソンは時代を主導する社会改革者であったという、本論の前提となる主張が提示される。

## B. Emerson and Science

本節では、個人の限らない成長の可能性を信じたエマソンの楽観的な世界観と18世紀末から19世紀にかけて発展した進化論との影響関係を分析する。物質と精神との間に対応関係を見いだしたエマソンは、自然界の法則が人間精神の法則にもあてはまると考えた。従って、彼にとって、自然について理解することが人間精神の深い理解と等価となり、このことが彼の科学への関心につながった。科学の中でもエマソンが最初に大きな影響を受けたのは天文学であった。科学への関心はロマン派の詩人たちにも共通するものであるが、本論はエマソンの自然観がとりわけイギリスの詩人コールリッジの影響を受けていることを指摘したうえで、両者の違いは、エマソンがそれをさらに徹底させている点にあるとする。

本論はエマソンの自然理解が表層から真理へ、低次のレベルからより高次のレベルへとスパイラル状に展開する方法を詳述し、さらにこの自然理解が彼の神学に影響を与えた点を分析する。18世紀から19世紀にかけての天文学的発見により、地動説が科学的に立証されるようになったことが、従来の伝統的なキリスト教的宇宙観の修正を迫ることになった。天動説から地動説へのコペルニクスの転換に、エマソンはカルビニズムからよりリベラルな宗教への転換へのアナロジーをみた。神の絶対性を強調し、人間の自由意志を否定するカルビニズムを、天と地を峻別する天動説になぞらえる一方で、地（球）もまた天空の一部であり天にも地にも同じ法則が働いているとする地動説に、よりリベラルで平等な世界観の可能性を見たのである。この天と地のすべてを統治する法が、伝統的なキリスト教の神に代わるものとして後にエマソンが提示した「大霊」(Over-soul)に結実すると述べている。

本論はエマソンの天文学に対する理解と神学的理解のアナロジーを端緒に、エマソンにとって科学と宗教は、他のロマン派の詩人の場合とは違い、矛盾するものとして捉えられのではなく、相互に影響し合い、補い合う関係にあったことを指摘する。天文学を通し

て宗教心を強めたエマソンは、その後科学に対して更なる興味と関心を向けるようになった。あらゆる自然科学は、彼にとって、大自然の包括的な法則を解明してくれるものであったからである。天文学に続いて、彼の科学的探求が植物学、動物学、生理学、地学といった諸分野から、やがて進化論へと導かれていったことを述べて、本節の結びとする。

### C. Evolution and Emersonian Optimism

第2章の最終節は、進化論へと発展したエマソンの科学的関心と神学的考察に支えられた楽観的世界観との相互作用について分析する。物質と精神との間にエマソンが見い出した対応関係は、サソリと人間の間にも神秘的な関係を感じたという有名なパリ植物園での体験を通して、進化論へと導かれる。これはラマルクらの著作に影響を受けたものであるが、18世紀末頃から出現した進化論は、この世界のあらゆる生物が一度に創造されたとする聖書の創世記を基盤とする“chain of being”(「存在の鎖」)という伝統的な捉え方から、下等な存在から人間を頂点とするより高度な存在へと、長い年月をかけて徐々に進化したとする“graduated scale of being”(「存在の段階的階級」)への転換を意味した。本論は、当時の進化論が自然淘汰や突然変異を想定していない点で、後のダーウィンの進化論と異なることを指摘したうえで、エマソンがこのような進化論により、宗教への懐疑を抱くどころか、個人が例外なく成長できるという確信を強めたプロセスを分析する。当時の進化論に個人の絶え間ない成長を重ね合わせ、これを前節で議したスパイラル的上昇の形と関連づけることで、人間の絶大な可能性を唱えるエマソンの楽観的宇宙観をより視覚的に解き明かそうとしている。また、この楽観主義が、固定した時空間でのスパイラル的上昇のみならず、国家的西漸運動という、当時のアメリカの領土的拡張主義にも呼応するものであったことを示唆し、エマソンをアメリカの歴史という時間軸にも位置づけようと試みる。

### 第3章 Emerson in the Age of Antislavery

第3章は、エマソンの個人の限らない進歩という点で「自己信頼」の思想を支えた進化論が、人種(とりわけアフリカ系アメリカ人)については、否定的に働いた点を検証し、この人種偏見を乗り越え、奴隷制廃止運動という社会改革に積極的に関わるまでのプロセスを分析する。

#### A. Self-Reliance and a Sense of Duty

本節では、エマソンを社会改革に対し消極的にさせたものとして、彼の「個人主義」と「科学的人種主義」(scientific racism)の2点をあげる。まず前者については、エマソンにとって進歩とは、個人のものであって、社会のためのものではなかった点が再確認され

る。従って、改革は個人から始まり、それが社会の全体的改革へとつながると彼は考えた。しかし、当時のアメリカ社会の奴隷制をめぐる国家的危機がエマソンを徐々にこの運動へと引き込むことになる。とりわけ、1850年の従来よりも強化された逃亡奴隷法を含む、いわゆる「大妥協」と、ニューイングランド出身の民主主義を支える英雄的政治家、ダニエル・ウェブスターがこの法案を支持したことが、彼に衝撃を与え、もともと政治活動に消極的であった彼を、その性分に反して、また哲学的研究を犠牲にして、公けの場に駆り出すことになったと結論づける。

本節ではこのプロセスの検証として、第一点目の「個人主義」と組織的な社会改革運動との相克を詳細に分析する。本論は、エマソンの自己信頼という考え方が、もともと社会と隔絶したものではなく、社会に対する個人の道徳的「責務」を孕むものであったことに着目し、奴隷制反対運動がこの自己信頼の原則の延長線上にあったと捉える。その根拠として、逃亡奴隷法に異を唱えた1851年の講演“Address to the Citizens of Concord”やアメリカの知的独立宣言として名高い“The American Scholar”を分析することで、エマソンの人間社会に対する“duty”の捉え方、思索に対する“action”の位置づけを考察し、彼にとって社会改革は自らの「自己信頼」という信条に決して矛盾するものではなかった点を指摘する。しかし一方で、このことが決して直線的な延長線上にあるのではなく、思索的沈潜と社会への責務、言い換えれば私的な自己と公的な自己との間にバランスを得て初めて成り立つものであることも示唆し、この絶妙なバランスを、エマソンが二重の意識（double consciousness）として捉えていたことに言及する。これが黒人作家デュボイスのいう抑圧された人種としての二重意識ではなく、二頭の馬を同時に操るサーカスの曲芸師的技としてイメージされたものであることを踏まえたうえで、アメリカで奴隷制問題が先鋭化するに伴い、エマソンが公私の間でこのように困難な舵取りを迫られつつも、自らを政治から切り離すことはできないと考えていたことを跡づける。

## B. The Personal Context and the Views on Race

本節では、前節でエマソンが奴隷制反対運動に消極的であった理由として提示された二つの要素のうち、第二点目の「科学的人種主義」について論証する。これは19世紀前半に隆盛した骨相学などの疑似科学にも共通するものであるが、当時の一般社会に浸透していた黒人の「人種的劣等性」という捉え方に科学的根拠を与えようとするものである。本論はエマソンもまたこのような誤謬に陥っていたことを確認する一方で、彼が周囲の者たちからの感化や現実の奴隷を目撃する体験などから、こうした人種偏見からどのように脱却していったか、その変遷を詳細に辿る。

まず奴隷制をめぐる周囲の環境について、エマソンの親族、友人、知人の存在を詳らか

にする。なかでも彼にとりわけ大きな影響力を及ぼしたお婆のメアリーの存在について、最近の研究で光があてられるようになってきた点をおさえたうえで、その影響の具体的内容について、彼の学生時代のエッセイや日記などを手がかりに見ていく。次に、エマソンの実際の奴隷（制）体験として、1827年にフロリダを訪れた際に目撃した奴隷売買から受けた衝撃について言及し、このことがキリスト教と奴隷制との矛盾について深く熟考するきっかけになったことを指摘する。さらに、1830年代に頻発した奴隷制擁護者による abolitionist（奴隷制廃止論者）への陰惨な暴力事件や、議会で奴隷問題を議すことを禁じた“gag rule”など、エマソンが体験したアメリカの同時代の緊迫していく状況を追いつつ、彼が奴隷制の問題から目を背けるわけにはいなくなるプロセスを丁寧に辿る。とりわけ、1837年の暴徒による奴隷制反対の立場を取る出版社の攻撃と、その所有者ラヴジョイの殺害が、エマソンに遂にアメリカの政治問題について公けの場で語らせるにいたったと指摘する。

エマソンは1837年の講演を皮切りにアメリカの奴隷問題について語り始めるが、このことが人種偏見の払拭を意味するわけではないことを、本論は第二章で論じた進化論との関係で検証していく。すなわち、エマソンにあった根深い、しかし当時としては平均的な人種偏見は、進化論という「科学」によって正当化されてもいた—アフリカ人は進化の途中にあり、したがって、将来の進化の可能性はあっても、現時点ではアングロ・サクソンよりも劣った存在であるとするものである。このような偏見が、先に詳述された奴隷（制）の直接体験により徐々に人間としての平等観へと変化していくのであるが、その決定的な変化が、エマソンも編集に携わっていた *Dial* 誌の1844年8月号に掲載された、西インド諸島の黒人の実態を報告した手紙にあると、本論はみている。全ての人間の神性（divine nature）は同じでも、知性（intellect）面での差異を否定できなかったエマソンが、知性においても白人と黒人は何ら変わらないとしたこのハントの報告書に影響を受け、知性と心を二分して考えていたこれまでの人種観を改めるにいたると結論づける。

### C. From Antislavery to Abolition

本節では、前節でみたエマソンの人種観の変化により、彼が比較的穏やかな奴隷制反対の立場（antislavery）から急進的な奴隷制廃止論（abolition）へと変貌を遂げる過程を検証する。先の *Dial* 誌と同年の1844年に行われた講演をそれ以前の講演と比較検討しながら、次の三点の相違（変化）を挙げる。第一に人種的平等の積極的な肯定、第二にアフリカ系アメリカ人の違法な拉致に対する怒り、第三に南部プランターに対する糾弾である。本論はこれらの変化から、この講演をもって、エマソンが遂に奴隷制廃止運動を積極的に支持するようになった証とする。

エマソンをさらに奴隷制廃止運動家へと促したものとして、1850年の逃亡奴隷法とこれを支持したダニエル・ウェブスターのスピーチ、1854年のカンザス・ネブラスカ法等を挙げ、これらを契機として行われたエマソンのいくつかの講演を検証し、1850年代を通して彼が奴隷制廃止に向けてより積極的な呼びかけを行っていく過程を分析する。また、講演のみならず改革運動のための募金活動、最も過激な abolitionist ジョン・ブラウンへの協力、時の大統領リンカーンとの会見など、行動においても人間としての「責務」を果たそうとしたエマソンを提示し、もともと活動家であるよりは思索家であった彼の変貌ぶりを示すと同時に、彼の奴隷制廃止運動への貢献とそれに対する当時の高い評価を示して、この章の結びとする。

#### 第4章 Emerson and Women's Rights

第4章は、奴隷制廃止運動と女性運動との歴史的つながりや、奴隷制廃止運動に関わった女性たちからの影響を通して、エマソンが徐々に女性運動に賛同を示すようになった経緯とエマソンの女性観の変化を考察する。

##### A. Engagement with the Women's Movement

奴隷制反対運動に深く関わるようになったエマソンは、他の改革運動、とりわけ女性運動にも理解を示すようになるが、彼が実際に講演を行うのは1855年まで待たなければならず、講演回数も公けに出版された著作も極めて少ない。本論は、エマソンの消極性の原因に、当時の「真の女らしさ」というイデオロギーの影響を見ると同時に、1855年に女性問題について公の場で語り始めた背景に次の三つの要素を挙げる。第一に奴隷制反対運動をとおして政治問題について語ることに抵抗が少なくなったこと、第二に社会改革を社会の進化の手段とみなすようになったこと、第三に奴隷制廃止論者の女性たちから影響を受けたことである。本論は、奴隷制廃止運動と深く関わることで、政治的働きかけが人間社会の進歩をもたらす可能性を信じられるようになったこと、改革運動に貢献することは人間の責務だと考えるようになったことが、エマソンと女性運動との関わりを促したと論じる。

##### B. The “Woman” Speech and the Views on Womanhood

エマソンが女性について公けに語った講演で（出版物として）現存するのは1855年の“Woman”とこれを改訂した1869年版のみである。本節は1855年の講演内容を詳細に分析することで、エマソンの女性観を検証する。この講演は主張が曖昧で矛盾に満ちているため、長年にわたり feminist speech とともに antifeminist speech とともに捉えられてきたことを指摘したうえで、本論はこの講演にエマソン自身の矛盾を読み解きつつも、女性運動を支持

する言説と見なす。女性運動に共感を示しながらも、これが女性の美德を損いかねないとするエマソンの矛盾については、その背景に「真の女らしさ」という 19 世紀ビクトリア朝時代のイデオロギーの影響を読み取り、このイデオロギーにはエマソンばかりか当時の女性たち自身も囚われていた点を指摘する。さらに「女性が望むならば」財産権、教育の機会、参政権をすべて認めるとするエマソンの「保留」の裏に、女性は「望んでいない」という前提が隠れているが、本論はこの彼の消極的な態度の背後に進化論との結びつきを読み取っている。すなわち、女性は黒人同様、いまだ進化の過程にあり、進化の頂点に立つ男性に劣るとする考えである。

しかし、進化論以上にネガティブな女性観を支えたものとして、性差に裏打ちされた男女の補完性という考え方を指摘する。エマソンは、女性の優れた特性として、会話力や情の深さ、宗教性をあげている。意思の力を男性のものとし、感情 (sentiment) を女性のものとする捉え方は、ありふれた男女のイメージであるが、当時の女性たちもまたそのように捉えていたこと、とりわけエマソンと親密な関係にあった 19 世紀中葉を代表するフェミニスト、マーガレット・フラーにもそのような考え方がみられることを指摘する。

エマソンの 1855 年版 “Woman” は、結局のところ、女性の領域を家庭に定め、結婚して家族に尽くすことに価値を置いている点で、女性を selfless な存在と規定しているといえる。本論は、この点で、個人の限らない成長を唱えた「自己信頼」との矛盾を指摘するが、他方で、「女性が望めば」という保留つきではあるものの、女性に男性と同じ権利を認めていることは、1850 年代のアメリカ社会にあって、きわめて進歩的であったことを力説し、antifeminist としてのエマソン像を否定する。

### C. Ideological Development

1855 年の講演以降、南北戦争後の 1869 年まで、エマソンは奴隷制問題に専心し女性問題については沈黙する。本節では、1869 年の講演を 14 年前の講演と比較検討し、そこに見られる変化を分析する。これら二つの講演における最大の差異は、「真の」女性は家庭という領域にとどまり、政治的参与を望まないとした言説から、すべての女性が男性と同じ公的権利の共有を望んでいると断言した点にあるとする。この変化については、以下の三つの要因を挙げている。第一にルイザ・オルコットやおばのメアリーらの奴隷制廃止運動への貢献により、女性に対する見方が変化したこと、第二に南北戦争中の女性の社会的活躍を目撃したこと、第三にエマソンの家庭内の独身女性、娘エレンの公的活動を日々体験していたことである。1869 年の “Woman” は、1855 年の内容をほぼ踏襲しながらも、財産権、教育の機会、参政権などあらゆる社会制度への参画が女性に認められるべきであるとする点で、明確な feminist の言説となっている。本論は、奴隷制廃止論者でもあり、女性



運動にも賛同していた妻リディアンの影響もあり、エマソンがこれら二つの運動の共通性に気づいた可能性を指摘する。

彼はさらに、男性が支配する公的活動が女性にとってふさわしくないとすれば、そのような社会をこそ変革して女性の参入に適するようにすればよいと述べるにいたる。本論は1869年の講演に、エマソンの女性運動への全面的な支持を認め、同年、ニューイングランド女性参政権協会の副会長に選出され、女性参政権を訴える *Woman's Journal* が彼の貢献を讃えるなど、エマソンが女性の権利運動のアイコンとなるまでの過程をたどり、4章の結びとする。

## 第5章 Emerson in the Household

5章は、女性の権利運動の主導者として讃えられたエマソンを実践面から検証すべく、彼の私的領域、すなわち家庭に光をあてる。本論はこの目的のために、主として結婚生活と交友関係について、それぞれ妻リディアンと知的親友であったマーガレット・フラーの視点から、現存する日記や手紙、伝記を中心に詳細に分析する。

### A. Emerson and Marriage

本節は、結婚制度そのものに比較的反動的な考えを表明していたエマソンが、現実の結婚においては、当時の平均的な男性と同様、家父長的な態度をとっていた可能性をリディアンやフラーの視点から明らかにする。結婚後間もなく亡くなった最初の妻エレンに注がれたエマソンの愛情に嫉妬したリディアンは、夫との距離に悩み、親密な愛情関係を求めるが、男女の愛は現世的現象にすぎず、個人の魂にこそ真の花嫁がいるとして、エマソンは妻との溝を埋めようとはしなかった。本論はここに社会改革者としてのエマソンと家庭という私的領域における夫としてのエマソンとの間の乖離があることを指摘する。彼はリディアンの感情を扱いかね、その情の強さゆえに彼女を「アジア」と呼んで他者化したが、彼女がエマソンの捉えたような感情のみに生きた存在ではなく、社会改革においては夫よりも先進的で、夫を行動へと促す存在であったことを明らかにする。

### B. Love, Friendship, and “Literary Gossip”

本節は、エマソンの私的領域に最も深く入り込んだ友人としてフラーをとりあげ、二人の交友関係から彼の女性観を逆照射する。エマソンがリディアンとの間では持てない知的会話をフラーと楽しみ、尽きることのない知的刺激を受けていた一方で、フラーに対して愛着と反発の相反する感情を抱いていた事実に、知的議論を楽しみながらも、家庭という領域を超えて男性の知の領域に入り込んでくる女性への恐怖や反発を禁じ得なかった彼の

なかに潜む、伝統的な女性像への固執を読み取る。他方、エマソンに父親像を重ね、より親密な関係を求めたフラーとの間に距離をおき、妻の場合と同様、感情的結びつきを避けようとした。このような女性との関わり方を手紙や日記などから分析し、亡くなった最初の妻エレンに理想の女性を、二度目の妻には家庭の必要を満たす主婦としての役割を、フラーには知的刺激を与えてくれるミューズのような役割を求め、そうすることで自身の知的生活と安定した家庭生活を確保したエマソンの家父長的で利己的な側面を読み取る。

他方、妻のリディアンもフラーと夫との排他的な知的交流に、家庭で一人孤立していたわけではなく、エマソン家の隣人でもあったもう一人のコンコードの作家ヘンリー・デイヴィッド・ソローとの交友を深め、家庭を顧みない夫に代わり、ソローに精神的、物理的助けを求めたことを付け加え、彼女が置かれた状況を相対化すると同時に、夫エマソンには決して捉えられなかったリディアンの女性としての魅力を示唆する。

### C. Lidian and “The Cult of True Womanhood”

第5章の最終節では、妻リディアンの創造性について掘り起こすことで、その才能がエマソンの父権的な力により押さえ込まれた結果、精神的な病を引き起こした可能性と、その押さえ込まれたエネルギーが「真の女らしさ」を超えて別の形で発揮された可能性を検証する。リディアンは著名な哲学者の妻として、4人の子どもの母として、エマソン家で働く人々の監督者として、また夫のもとを訪れる多数の客人をもてなすホステスとして、家庭を立派に切り盛りしたが、このことは、ある意味で典型的な「真の女らしさ」を体現していたといえる。本論は主として娘エレンの証言やリディアン自身の手紙などをとおして、彼女が家庭面で有能だったのみならず、経済面でもエマソンよりも優れていたこと、執筆活動への強い希望を持っていたことなど、伝統的な女性の枠組みを超えた領域へ踏み込もうとした事実を明らかにする。リディアンが執筆を断念した背景に、彼女が書いたものに対するエマソンの低い評価や、女性には男性の創造性を支えるミューズの役割しか期待しなかったエマソンの伝統的な女性観があったことを指摘する。

本論は、リディアンの押さえ込まれた創造性が、別の二つの形をとって現れたとみているが、その二つとは、エマソン家を常時訪れていた70人から80人の客人たちを、ウィットに富んだ会話で楽しませることと、社会改革運動に積極的に関わることである。前者に関しては、リディアンの雄弁な語りぶりが子どもたちや客人たちの証言によって裏付けられる。後者については、ここであらためて社会改革運動におけるリディアンの先進性が力説され、エマソンが彼女に促されるように改革運動に関わっていく過程が再確認される。しかしリディアンは同時代の多くの女性同様、男性支配を直接攻撃することではなく、19世紀の女性に期待された役割に合わせようとした結果、長らく精神的に苦しむことになるが、

エマソンは彼女の苦悩を理解することなく、これを“evils”と呼んだ。本論は、家庭内の事項を些末なこととして顧みず、「妻を養い、暴力も振るわなければ夫の務めを十分果たしている」とする日記の言説に彼の父権的な女性観の例証を見て取ると同時に、エマソンが人間の限りない進化を奨励しながら、一番身近な女性の可能性を延ばせなかったことの皮肉を示唆して本章の結びとする。

## 第六章 Conclusion

結論部の第6章は、女性運動の支援者という公けの顔と、家庭でかいま見せる伝統的な家父長的男性との溝を、エマソン自身がどのように乗り越えていったかを、神（Divinity）の捉え方の変遷を通して論証する。男性に肉体的強さと積極性を、女性に弱々しい受動性と宗教性をみるという伝統的な性差に基づくジェンダー観を有していたエマソンが、男女の違いには文化的、歴史的条件付けがあることに気づくようになったことを、彼の日記から辿る。その最も大きな要因として、社会改革運動を通して女性の能力に目を見開かれたことを挙げる。

宗教性を女性の優れた特質と見ていた頃のエマソンは、神と人間の関係を母と子の関係になぞらえた。神を父となぞらえることの多い時代にあって、神に母性のイメージを付与すること自体が興味深いが、後に彼は神をより中性的な存在とみなすようになり、「大霊」もしくは「法」と呼び、ジェンダー化された神から脱却する。彼はさらに神の両性具有性を重視するようになり、“Man-Woman”に理想をみるにいたる。あらゆる女性は男性の娘であり、あらゆる男性は女性の息子であるからには、男女を区別すること自体が無意味なのであって、人間は性差に関係なく神へと進化し続けると考えるにいたる。このような超越的な考えは人種にも適応されていることを、本論は指摘する。人種の差は一時的なものであって、人間の進化や精神的発展にとって重要ではないと、エマソンが考えるようになったと分析する。

本論は、従来のエマソン像が彼の名声を利用しようとした人々によって歪められたこと、一次資料の不足によって明らかにされなかったことや、初期伝記作家の影響によって切り捨てられた部分があることを再確認したうえで、それに代わるものとして、社会改革者エマソン像を提示して結びとする。

## II. 論文審査の要旨

本論文の学問的業績は、第一に、アメリカ文学における従来のエマソン研究が、その哲

学的思想や他の作家への影響に関する研究に集中してきたのに対し、近年新たに始まった社会改革者としてのエマソンの再評価の流れを踏襲しつつ、さらにそれを発展させた形で検証するとともに、これまでほとんどまとまった研究がなされていないエマソンと女性の権利運動との関わりにも深く踏み込み、より包括的な研究となっていることである。また、社会改革者としてのエマソンを扱う際に、その講演記録や歴史的事象のみを議論するのではなく、彼の根幹にある哲学的思想との関わり、とりわけ進化論とのつながりを詳細に吟味している点で、議論が表面的に終わることなく、重層性をもったエマソン像の提示につながっている。

第二に、エマソンの奴隷制廃止運動や女性の権利運動との関わりを考察する際に、それぞれ人種観、ジェンダー観を詳細に検証し、その限界を同時に示し得ている。とりわけ、女性運動家としてのエマソンを、家庭人としてのエマソンから逆照射し、公的領域と私的領域、理論と実践との間の乖離を明らかにすると同時に、これまでまとまった研究がほとんどなされてこなかった家庭の領域に光を当てることで、ジェンダーという視座から新しいエマソン像を提示し得ている。

第三に、上記の議論を展開するために、エマソンの日記や書簡といった膨大な量の一次資料、また彼の周囲の人々の書簡や自伝、伝記などを渉猟し、関連資料の欠乏を補うとともに、これらの多様な資料を従来のエマソン像の批判的言説としても援用しているが、このことが他の研究にも応用できる可能性を秘めた新しい手法を示唆しているといえよう。

第四に、エマソンの進化論的思考、人種観、女性観という、それぞれに大きなテーマを深く考察するとともに、ややもすると単なる列举に堕してしまう可能性のあるこれらのテーマを有機的に結びつけ、説得性をもった論を展開している。

第五に、比喩やアナロジーに満ち、一見矛盾や飛躍や繰り返しが多く、捉えがたいとされるエマソンの文章を明快に分析し、本論文の論旨に沿った的確な引用をしている。

審査において、いくつかの問題点と今後の課題も指摘された。第一に、人種、ジェンダーへの考察には説得力をもつ論考がみられるが、階級への考察が不十分ではないかということ。エマソンのジェンダー観というとき、それが中産階級の女性をさすのか、労働者階級も含むものなのか。あるいは、移民や白人以外の人種はどのように捉えられているのか、もっと厳密な議論をすべきであろう。またエマソンの思考と彼が属する階級との影響関係についても、慎重な検証が必要となるであろう。

第二に、従来の研究がエマソンの社会改革者としての側面を見落としてきた理由として、著名な伝記作家の影響を挙げているが、その歴史的、社会的背景をもう少し詳細に吟味すると、その後の見直しの意義がより鮮明に浮かび上がってくるであろう。

第三に、第5章の家庭人としてのエマソンを検証した部分は、資料が極端に乏しいため、エマソンと周囲の女性との関係に集中し、ややもすると叙述的記述へと傾きやすいことが指摘された。しかし一方で、この部分は本論文の独自性を示す箇所でもあり、資料の乏しさを超克するための新しい手法という可能性も秘めている。今後、この新たに掘り起こされた部分に更なる学術的論考を加えることが期待される。そのためには、たとえば、フラーをエマソンとの関係性のみで捉えるのではなく、フラー自身の女性観を示す必要があるであろう。とりわけ、エマソンのフラー伝と彼女の代表作『19世紀の女性』の比較検討が有効だと思われる。

第四に、第5章で女性観におけるエマソンの限界が示されながら、結論部で再びエマソンがその限界を超えていくことが神の概念の変遷によって示されるが、少々唐突すぎる嫌いがある。少なくとも、5章における論述と密接に関連づけながら、クロノロジカルな経緯を明らかにする必要があると思われる。

#### 審査結果

審査委員会は、本論文が社会改革者としてのエマソンを論考するにあたり、十分な資料収集と優れた分析を行っている点で、学術論文として高い水準にあること、また先行研究を踏まえつつも新しいエマソン像を提示し得ている点で、この分野に貢献するものと認めた。これをもって、申請者に博士（文学）の学位を授与することを全員一致で決定した。

2014年9月21日

論文審査委員（主査）津田塾大学 教授 野口 啓子  
教授 椿 清文  
教授 池野 みさお  
神奈川大学 教授 山口 ヨシ子